

R18

えっちなこと……
好きになっちゃいました♡

最初はムリヤリ

でもこの通り

こんな風にも
されちゃうお話
その1

「うう……もう少し
手加減してくれても……」

「あなたのように
突然女性に抱きつかうとする変質者に
手加減など無用です
今日だけで何度も何度も……」

「それだけヤミちゃんのことを
好きだという証拠ですよ」

ピロピロ

「ヤミちゃんは『恋愛』がどういうものか
知りたいのでしょうか？
これはわしなりの愛情表現なんですよ」

ゾゾゾ……

「き、気持ち悪いことを言わないでください！」

「ヤミちゅわん!!」

「トランス！」

「うぼあっ!!」

「えっちいのはキライです」

「うう……でも一瞬白いモノが……
服が黒いとチラリと見える
印象も鮮烈になりますなあ
これだけでわしは……」

ポカッ! ドカッ!!

「痛い! 痛い!
倒れている相手を殴るのは良くない!」



ヨロツ……

「え……!?
あ……、これ……!?」

(トランスの使いすぎ?
こんなときに……)

「ぐふふ、どうしたのかな?」
「ヤミちゃん?」

「い……いいかげんにしないと
本当に殺しますよ!」

ピクピク

ゴゴ

?

「くっ……」

「そんなこと言ってるわりには
顔色が悪いですねえ
早く逃げないと捕まえちゃいますよ」

(くくく……
今は見逃してあげますよヤミちゃん
こちらトランスでボコボコにされて
余裕が無いですからねえ……)

「もう入ってこられても大丈夫ですよ校長」

「うむ」

「ドクターミカドでなければ治療は受けないと……ずいぶんダダをこねられましたけど……」

「いないものはどうしようもないですからねえそのために彼女を旅行に行かせ闇医者である君を待機させておいたのですから」



「それで、例の処置はできるんでしょうね」

「ええ、もちろんです」

「彼女のトランス能力の源
ナノマシンを性感増強に利用する……
これで、わしを撃退してきたにつつき能力が
逆に彼女を苦しめることになる」

「くくく……
治療されているつもりが
痴療されているとは
彼女も夢にも思えない」

「……」

「……なんですかその目は
下らないオヤジギャグとい
いながらこの人が学校の校長を
やれてるんだらうな」
「とか
思ってますよね？」

「ははは、めっそうもない……
それでは処置を始めます」



「処置は全身に行いますが、特に感度を上げた場所はさらなる処置を行います」

「衣服に身体がこすれただけで相当の快感を覚えるようになるでしょう」

「こうしてじっくりとヤミちゃんのおっぱいを揉まれているのを見ると良いものが見られて嬉しい反面、獲物を横取りされているような悔しさもわき上がってきますなあ。はあはあ……ちょっとキミはその操作わしがやっちゃダメかね？」

「ちよっ、校長!? 勝手にコンソールに触らないでください。ここは抑えて」

「しょぼん……」

シユルルル

パキ

パキ



「効果が始まる明日に備え
今日はわしも回復に努めましょう」

「ありがとうございます」

「くくく……
どんな夢を見ているんでしょうねえ
では以降の処置を頼みますよ
成功の暁にはこの町での
不自由のない暮らしを約束しましょう」

「う……ん……」

「やはりドクターミカド以外に治療を任せたのが間違いでした……」

(でもトランスを
使すぎたときの
ような目眩はない)

(熱っぽいけど意識ははっきりしてる
でも身体を動かしたときに起こる
この痺れは……?)

(背筋がぞわぞわして
思わず身をよじってしまう)

ギョウラゲ

(でもそうすると服にこすれた部分から
さらに痺れるような感覚が走って……
胸などは痛いくらいに張ってる)

「治療の失敗……とは違う……?」

ドンッ!!

「ひうっ……!?!」

(何が起こったの!?
胸? 掴まれてる?
でも今、腰から背筋を
電気が走ったみたい……)

「うわわわっ……!!
ご、ごめんヤミー!」

びびり

アハハハ

「ご、ごめん、今すぐ離れるよ!」

「結城リト……
あなたという人は……
いよいよ死にたいようですね?」



「ちよっ……モゾモゾしないでください！
は……ああ……っ！」

（な、なにこれ……
彼の指が動くたび……
腕を引き抜こうと脇を擦るたびに
身体の内側が波打つみたいなのが……）

「だ、大丈夫か？
今日学校休んでたろ？
体調悪いんだったらミカド先生の
ところまで連れそって……」

「そ、そうやってまた私に
えっちなことをする気ですか？
話す前に離れてください！」

☆ド☆♡

☆ド

「わ、わざとじゃないって！！
悪かったよ
じゃあ無理するなよ……」

「無理などしていません！」

は

ん

△

ふるる
（とにかくもう一度診療所へ……
ドクターミカド……
今日はいてくれると良いのですが）

（それにこれ
なんだかヌルヌルしているような……）

（くっ……下着も濡れているみたい
もしかすると漏らして……
脚を伝ったしすぐがブーツへと流れていて
気持ち悪い……）

（ああ……思考が定まらない）

（彼には以前にも胸を触られたことが
ありましたが、こんな風にはなかった
その違いを知られたくなくて……
なんで……？）

（結城リトを頼ってもよかったはずなのに
強情を張ってしまった……）

ぎゅ

「くっ……ドクターミカド……
何で……いないの……」

（ああもう……凄い濡れちゃってる……
なんでこんなにビショビショなの？）

（それにやっぱりヌルヌルしてて……
おしっこじゃないなら……
……もしかして……愛液？）

（確か女性が性的に興奮すると……
ち、違う！
私、そんなえっちなこと……）

（でもだとすると、先ほどから感じている
この痺れのようなものは……）

「わぁ」





「もっと、指動かしたくなっ
てく……ん……はあ……ッ」

（だ、めえ……こんな
の、すぐに止めないと
でも、指とまんない……）

「これ……すごい……
キモチ……イイ……はあ……」

あ

あ

あ

あ

あ

「この感覚が、快感……
これが、えっついこと……」

（す……ごい……
アソコから波が広がってえ……）

「ひうッ……」

あ

あ

グイッ

「ひ、はああああッ……ッッッ!」

「まさかヤミちゃんのオナニーが見られるとは……これは服など着てる場合ではありますまい」

「校長……!?
なんでここに……!」

「これ……
目の前の、お、男の人の……」

「離れてくださ……ひんッ!
や、引っ張っちゃ……!!」

「わしが近づいてきたことにすら
気づけないとは……くくく
パンツもこんなに濡らして……」

「くっ、トランス……!」

「……なんで!?
トランスできない!?」



「言ってくれれば
いつでも手伝いますよ
どうですか？ こんな触り方は」

「ふああああッ……！」

「ワレメに沿って
指を動かすたびに
クチュクチュと
エッチな音がしますねえ」

（なに、これえ……
自分で触っていたときと
全然違う……）

「お返しにわしのチンポも
舐めてくれませんか？」

「お断りします……！」

（でもこれ凄く良い匂いがする……
な、なんで……）



「ホントは舐めたくて
たまらないんでしょう？」

「うう……」

（この口ぶり……
もしかして私の身体の異変も……
ああ、でも……そんな触り方あ……）

「舐めてくれますよね」

（ここで言うとおりにしちや
ひうっ……！
ダメ、敏感なトコ触っちゃだめえ……）

「舐めてくれますよね」

「わ、分かりました……
だ、だから、もう触るの……止め……ひううッ!!」



(了承したものの……
なんとかスキを見つけて
逃げ出さないと……)

フツッ

「早く、早く」

フツッ

「くっ……」

(これが男の人の……
ドクドク脈打ってて
それになんだか
凄くえっちいカタチ……)

「ん……」

(こんなの嫌なのに……
でもこの臭いをかいてみると
無性に身体が熱く……なって……)

クチュ……



「ん……クチュ……チュ……」

(これ……おかしい……
舐めてるだけで
私まで気持ち良くなってる……?)

「気に入ってもらえたみたいですねえ
はあ……ヤミちゃんの小さいペロが
わしのチンポをぺろぺろと……」

「チュプ……クチュ……チュ……」

「これは……くっ……
視覚的に興奮しますねえ」

(うそ、まだ大きくなるの……?)



「やっ!?」

「さっき触らないと……」

あむ

は

「そんな約束しましたかね〜」

チュパ

しゅろ

びゅん

「やめ……チュパ……そんなの、頭へんになる……
んく……だめ……いじっちゃ……や……!」

んん

ピチャ

せろ

「否定してもココからはどんどんオツユが
出てくるじゃないですか
もっと触ってほしいのではありませんか?
ほらっ……ほらっ……」

「ひう……ひん……!
……はっ……はひ……!」

(なにこれ……さ、触られるたびに
目の前がチカチカって……)

んん

ちゅ

んん

「ほらほら直接接触しちゃいますよ」

「ひうつ……ダメツ！
そこ、直接、ダメエツ……！」

「思った通りのツルツルマンコ
それをこんなに濡らして……
ヤミちゃんはえっちいなあ」

「ちが……私……はひんっ！」

「さっきからヒクヒクして……
もうすぐイッちゃいそう
なんじゃないですか？」

「イク？……な、なんのこと？」

「なに……言って……クチュ……
ひああッ……ん……くう……
触っちゃ……らめえ……ッ！！」

あーっ

あーっ

あーっ

シユ
ボ

シユ
ツ

ボ

シロ

グ
チ
ユ

ツ
ツ

ビ
ク
ッ

ヌ
ル



「ほくら、ピンカンお豆を
ぎゅ〜……つと」

「ヒグウツ

(な なに……これえ……)

「ツツツッ!」

ビュグッ

ビュルル

「はあ……はあ……ひ、ひん……」

「くくく……ハデにイキましたねえ……
わしも興奮して思わず出しちゃいましたよ」

「イ……イク……?
今の……が?」

「そうそう、性的絶頂、アクメ、オルガスム
言い方は何でもいいですが……ん?」

「……」

「失神してしまいましたか……
まあ、性感増幅されて
そのうえ初めてですしねえ
じゃあ、続きはウチに
帰ってからにしましょうか」

ビュッ

っは

あ

ビュグッ

ビュッ

ビュッ

ビュッ

ギョウ

イカカ



「ん……」

トロ……

(な……に……?)
お尻に何かヌルヌルしたものが……)

「な………こは………？」

「おはようございますヤミちゃん」

「キヤッ……！」

「いまさら身体を隠しても遅いですよ
さっきまでじっくり鑑賞してましたし」

トロ——

じゅわ

じゅわ

「く………ではそのヌルヌルをかけるのを
止めて………ください………ひんっ」

「くふふ………ローションのしずくが
体表を伝うだけでも
気持ち良いんでしょう？
これからもっと良くしてあげますからね」

「ひ、人の話を………」

「ひああっ……!!!」

「えっちいいことが
好きなヤミちゃんは
ヌルヌルのことも
ほんとは好きなんですよねえ」

ヌルヌル

ヌルヌル

ヌルヌル

ウチ

「ちが……はあああ……
これは……アナタが
何かしたんでしょ……!」

「ナノマシンにちよつと細工をね
感度が常人の数倍になっているはず
ちなみにトランスもできないでしょ?」

「そ……そんな……」

「今は楽しみましょうよ
ほら、もう全身がヌルヌルですよ」

あーあ

あーあ

あーあ

あーあ

ヌチャ

ヌチャ

「こうしてわしの全身でもって
ヤミちゃんを気持ち良く
してあげますよ
ローションプレイの醍醐味です」

ぬるるるるるるるるるる

「や、誰もそんなこと
頼んで……ない……」

（これ……ヌルヌル……
すこい……ッ！
体中さわられてるみたい……
こんなの気持ち悪いはずなのに……）

ヌチャ

ヌチャ

やめ……

ヌチャ

ヌチャ

ヌル

「や……くう……なにか……
お尻に当たって……る
……くひッ……」

「チンポですよ
思い出してください
さっきぺろぺろしてたもの
あれがヤミちゃんの中に
入りたがってるんですよ」

「やめ……ッ!?」
「の……く……ッ……」

はっ

くう

ヌチャ

ヌルン

「抵抗しても無駄無駄」

「くひいっ……
む、むね……
いじらないでえ……」

ズルン
ズルン

「トランスも使えず
この体格差で押さえ込まれて
おまけに全身ピンカン状態……
もう諦めてチンポ
受け入れちゃいましょうよ」

「いや……です……
やめ……ぐりぐり
擦りつけないでえ……」

「チンポのかりでクリトリス擦られて
気持ち良いでしょ
もっと強く擦りつけちゃいますよ」

「や……く……はあ……
も、おちんちんやあ……んあっ……」

もにゅ

はゅっ

はゅっ

はゅっ

ちゅぽ

ちゅぽ

ちゅぽ

もにゅ

はゅっ

はゅっ
はゅっ

はゅっ

はゅっ

ギ

ギ

ギ

ギ



ピクッ
ピクッ
ピクッ

はん

あ

「ら、らめえ……」

「イっちゃつきましたねえ
小さい身体をピクピクさせて
でもこれからが本番ですよ」

「乳首もクリもこんなに勃起させて
ほらっ、ほらっ」

「ぐひここ……んッッッ!!」

「……かはっ……はあはあ
……ん……はあ……」

ヌルン

ヌルン

ゴクッ

た

あ

ゴクッ

ゴクッ

ゴクッ

ゴクッ

ヌルン

ゴクッ

ゴクッ

ゴクッ

ゴクッ

ゴクッ

「や……そんなの
……入らな……」

「ほらほら、暴れないで」

「だめ……逃げようにも
力が入らない
それに腰持ち上げられて……」

「最初ちよつと痛いかも
しれませんがすぐに気持ち良
くなりますからね」

「気持ち良くなんか……なりたく……
あつ……また……だめ、擦りつけないで
はあああんッ……！」

「ちよつとクリを擦っただけなのに
大人しくなっちゃって
じゃあ、そろそろヤミちゃんの初めて
もらってあげますからね」……ふんっ」

ズ
ロ
ロ
ロ

く
く
く

ゆ
た

ゆ
た

ゆ
た

や
ッ

お
お

う
う

ふ
ふ

「やめッ……ッ」

ゆ
た

「かっ……はっ……は……ふ……」

「うう……
なんて凄い締め付け……
ローションのおかげで
もっとスムーズに
入ると思いましたが……」

（お、大きい……裂ける……！）

「わしのモノを追い出そうと
してくるようで……
くく……征服欲を
かきたてられますなあ
ふう……うんッ！」

「ひうッ……ッ！」

（うそ、まだ入ってくる……？）

「見えますか？
オマンコから初めての証が垂れてますよ
……って、そんな余裕は無さそうですね
そらっ、もうひと押し……」

「んああああッ……ッ！」



「ここがヤミちゃんの一番奥ですか
まだチンポが全部入りきってませんが
これからほぐしていきましょうね」

「か、勝手な……ふー……くっ……
こと……を……は……はふ……」

「ちょっと落ちつくまで
クリとか胸で
気持ち良くしてあげますよ」

「ひああああ……ッ！」

(痛いのに……気持ちイイ!?
勝手にアソコが締まって
嫌でもアレが入ってるのが分かる……)

「くっ……ん……ぐう……」

「あれ? どうしたんですヤミちゃん
声我慢してるんですか?」



「ほら、もう本格的にピストンしちゃってますよさっきまで処女だったマンコにじゅぷじゅぷ入っちゃってる」

「あッ……ひッ……ひんッ……はあッ……！」

（今度はヌルヌルを伝って振動が全身に広がって……こんなに激しくされてるのに気持ちイイなんて……）

「くくく……ヌルヌルプレイはお気に召したようですねえ」

「ちが……ぬるぬる……なんて……」

（どこもかしこもぬるぬるで身体の境目が分からなくなる……なにが……なんだか……）

「ではとっておきのヌルヌルをプレゼントしますよ子宮で受け取ってくださいね」

「……まさかそれって!? やっ……らめ……やめ……！」



「わしのチンポは
まだ満足してないようなんですよ」

「ひああああッ——ッッ!？」

「くくく……挿入れたままで体位を
変えるのは刺激が強すぎましたか?
今度はヤミちゃんか
動いて欲しいんですが……」

「か……はひ……」

!?

「そんな余裕は無さそうですねえ
では……ふっ」

「はあああああ
こ、これ……深ッ……!
そんな……入らな……」

「大丈夫ですよ
もうかなりほぐれてきてますから
全部入るはず……です……よッ!」



「ふごおおおおお——ッッ！」

「うはは、膣内に入ってた精液が吹き出て凄いい音がしましたねえッビビッ”ですって”」

「らめ……ごんなの……ご、ごわれちゃう……」

「でもさっき射精してから子宮口がずっとチンポに吸い付きっぱなしですよ？ 精液ほしがりの淫乱マンコ」

「そんなの……うそ……」

「遠慮しないでいいですよヤミちゃんのためなら何度でも出せますから」

「や……そんな……いらな……」



「ふうっ……くうう……はぁ……」

「これえ……さつきより深い……
突き上げられるたび
頭のとっぺんまでずんずんくるう……」

「脚がガクガクですわねえ
チンポ根本まで入れられて
膣奥突かれるの
そんなに気持ちいいんですか」

「ほら、こころですよ」

「ふううッッ……！
そんなに、突いちやらめえ……！」

「わ、わかんらい……
かってに……
ピクピクッ……て……」

「初めてでポルチオの
良さを味わえるなんて
ヤミちゃんは幸せ者ですよ」

「うう……こんなの……！
こんなのお……！」



「慌ててチンポ抜こうとする
ヤミちゃんも可愛いですねえ
生まれたての子鹿みたいにプルプル震えちゃって」

「ううう……」

は—
は—

はひひ

〜ん〜ん

ぷぷ

〜ん〜ん

どろどろ

は—

あ

あ

「それにしても次から次へと垂れてきますね
我ながらよく出したものです」

(はやく……かきださないと……
でも、もう体……動かない……)

「今日はこの辺でおしまいになりますよ
早く慣れた方が楽しいですよ……ふひひ」

ズルン

ドロドロ

ズルン

ズルン

ヒラヒラ

〜ん〜ん

(この部屋にも……無い……)

(ドクターミカドが
どれくらいで帰ってくるか分からない以上
この身体の異常を治す手がかり……)

(葉やカルテのようなものでも
見つけてから脱出したいのだけど……)



「こんなところにいたんですか」

「クッ……！」

「おっと……逃げても無駄ですよ
この屋敷の出入り口は
わしてなければ開きませんから」

「……」



ぐんぐん……

「ベッドルームからいなくなっていて驚きましたよ
昨日の今日でたいしたものです
ところで、お探しのものはコレでしょうか？」

「ッ？」

「ヤミちゃんの
身体を治すお薬ですよ」

「それを渡しなさい」

「おお怖い
トランスが使えなくても
体術でわしをボコボコにすれば
薬も奪えてここから脱出もできる」と

「……」

「しかし……」

「ッ？ なにを!？」

ス
ッ



「これ、カラッポなんですよ
ちなみにわしが飲んだんですがね」

「どういふことですか……?」

「昨日に比べて身体の調子が戻っているの
ヤミちゃん気付いてますか?」

存?

「……………」

「それね、膣内射精されたからなんですよ
別に精飲でもいいんですけど……」

「これはわしの精液を
回復薬にする薬だったんですよ
他の方法はありません
施術の情報も全て処分済み
この意味お分かりですよね」

「わ、私にあなたの性欲処理をしろ……と?」

「なに、一週間ほどですよ
完治すればトランスも使えるようになります」

「くっ……
すべて計画通り……ですか」

「ここまででは、ですがね」

「そうそう、言い忘れていましたが
ちゃんと性的興奮を経た出した精液でない
と回復作用はありませんから
無理矢理出させても……
いやそれはそれで興奮しますが……」

「各種衣装やえっちな小説もありますから
いろいろと趣向を凝らしてくださいね」

「身体が元に戻ったら……
覚悟しておいてください」

「くっく……、一週間後に
どうなっているか楽しみですねえ」



「まずはスク水ですか
身体のシルエットを強調する紺色と
スカートを思わせる下腹部の構造
良いですねえ」

「あなたの用意した小説によると
これで男性は興奮すると……
さあ、はやく射精してください」

「そんなのでは
勃起もしませんよ……」

「くっ……
ではどうすればいいんです」

「男をその気にさせるには
女の子の方もえっちな気分にならないと
ヤミちゃんが読んだという小説の通りに
してみてください」

「そんなこと……」

「さあ思いだして」



「ナミはとまどいながらも自らの双眸に手をのぼす……薄い胸の肉を通して伝わる鼓動は彼女が確かに興奮していることを……」

「お、それは『スク水女生ナミ』淫欲の対抗試合』の一説ですねその調子ですちっちゃい胸を包みこむように周囲から……」

「わ、私だってトランスを使えば……」

「気にすることありませんよ小さい胸が好きなおもいますからこのわしのように」

「あ、あなたに好かれても嬉しくありません」

「だんだん興奮してきましたか？ フトモモを通じてヤミちゃんの熱が伝わってきますよ」

「くっ……ふう……んんッ……はあ……」

——もにゆ……もにゆ……

ぐっぐっ

ふっふっ

モリヤ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

くっ……ふう……んんッ……はあ……

「どれ、ちよつと水着の上からオマンコを開いてみてください」

おまんこ

ニ……

「くろう……」

「オマンコのカタチが丸わかりですよ
お豆から穴の場所までばっちり
それなんですかこのシミは？」

「それは……」

「自分でオツパイ揉んでで濡れちゃったんですか？
それにおかしいですね
今もシミが大きくなっているような」

「うそです……そんなこと
ありません」

「くくく……では股間の部分を
露出させてみてください」

「アソコじゃなくてオマンコですよ
えっちい小説では
そう言ってますんでしたか？
男は言葉でも興奮するんですから」

「そんなの要りません
それに濡れているとしても
それは性感増幅のせいで
私の意思では……ひゃっ！
アソコに息を吹きかけないで……！」

「何を言うんですか
素直じゃないヤミちゃんに
自分の身体がどうなっているのか
善意で教えてあげているというのに」

「そ、そのえっちい解説止めてください」

「やはり濡れてますねえ
クリトリスも勃起してきて
皮から頭がちよっと出てますよ」
「小陰唇も綺麗なピンク色で……
まるでまだ汚れを知らない
乙女のような慎ましきです」



「や……も、なめちやだめえ
いや……なんかキます……
出ちゃううう……」

「よく言えました
ご褒美にもっと気持ちよく
してあげますね」

「お、おま……オマンコ……!!
そんなに舐めないでください!!」

「オマンコですよ……
ホラ……じゅるる」

「やあ……そんなトコ……」

「ヌルヌルを出してるのはヤミちゃんですよ
ほら……ちゅば……こんなに……じゅるる」

「ひらッ……や……ヌルヌル……」

「べろっん」



「イッちゃって脱力してるのも可愛いですが、いいんですか？最初の目的を忘れて」

「も……目的？」

「ほらほら、目の前にあるでしょう」

「あ……」

（凄い……大きくなってる
さっきまではフニャっとしてたのに……）

「ヤミちゃんが勃起させたんですよ」

（私のえっちなところを見たから……）

「私が……」

は——

「ヤミちゃんももつとえっちなくなれば興奮して精液だってもつとたくさん出ますよ、きつと」

は——

（もつとえっちなになれば……）

ふん

ふん

ふん

ヒッ……ン

〇〇〇

(別に口車に乗せられるつもりはないですが)

「ん……………ぺろ……………くちゅ……………ちゅぽ」

(それで早く射精させられて身体が元に戻るといふなら……………)

「お、なんか積極的になってきましたね」

「別にアナタに奉仕するためこんなことをするワケではありませんから」

チユ

しゅ

(何か出てきた……………精液……………じゃない確か、カウパー氏腺液……………)

すあ

「先走り汁にもごく少量ですが精液が含まれているそうですからね綺麗に舐め取った方が良いでしょう」

「ん……………ちゅちゅ……………じゅるる……………るろ」

ズ

しゅ

ズ

しゅ

(カウパー……美味しい……異常を回復するために身体が……求めているのかも……)

「ちゅ……くちゅ……んく……ちゅば……」

「素直で良いですねえ私もお褒美をあげたくなってますね」

ちゅっ

やっ

「ひあッ……ちよっ……やめ……集中できない……はああ……」

あッ

「くすくす……、もっと激しく舌を使わないと精液は出ませんよ」

あッ

「んっ……ちゅッ……くちゅるろ……ちゅば……れろろ……んちゅ……」

「くお……そうです手でもしごいて……」

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐん

あッ

あッ

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐんぐん

ぐんぐん

「んんんんんッッッッッ!」

(なにこれ!? オマンコのあたりが全部気持ち良くなってる!? な、何されて……!?)

「舌の動きがおろそかになってますよ
まあ、クリとGスポットとアヌスを
同時に責められれば
そうなるのもわかりませんが」

「んっ……ん……じゅぱ……んんッ!
ん……うう……じゅッ……んんッ!」

(そんなに舌でほじらないでえッ
オシリも……汚いの……
なんでこんなに気持ちイイの……)

「もうイっちゃいそうですか?
わしもそろそろですよ
一緒にいきましよう……ねっ」

ちゅぽ
ちゅぽ
ちゅぽ
ちゅぽ

ニブルル

ちゅぽ
ちゅぽ
ちゅぽ

ッ……
♡

ハッ♡

ハ♡

ちゅぽ
ちゅぽ
ちゅぽ

ハッ♡
ハッ♡
ハッ♡

ク
チ
ユ

ハッ♡

レロ

チ
ポ
ッ
ッ
ッ

ハッ♡



「ふああああ ツツッ！」

「くうッ…… ヤミちゃん、クチ開けて、クチ」

「うぶ……んんん……ぶは……んぐ」

「そうそう、ちゃんと飲まないよ」

「顔に飛び散ったのも手で集めて飲み干すんですよ」

「は、はい……んん……ぺろ……んぐちゅ……」

（ああ……すごい精液が……身体に染みこんでくみたい……）

キーン

ヤーン

ひん

ガク

ガク

ムアムアム

ズ

ムアムアム

ガク

ガク

ガク

ズ

ズ

ビクビク

びゅ

びゅ

びゅ

びゅ

びゅ

びゅ

んん

んん

んん

ガク

ガク

ガク

ガク

「やっ……離れてください！
するならクチで……」

「くくく……
さっきまでの威勢はどうしました
その格好に似合いの
セリフを言っていたではないですか」

「あれはアナタを
興奮させるための演技です
挿入を許すわけでは……」

「そのワリには
こんなに濡れ濡れにして
婦警さんも興奮してたんでしょ」

「ちが……
やっ……挿入れるのは……
チンポ……擦りつけないで……」

「まあまあ
オマンコの方がたくさん精液出ますから
ね、ね」

「そういう問題では……」

（またこの人のペースに
乗せられて……
このままじゃ今日も
腔内に出されてしまう）

グ
グ
グ

ビ
ビ
ビ

人
ロ
ー



「や……は、入って……」

「見ないのは逆効果ですよ
こうやってゆっくり入れられると
チンポのカタチが
ハッキリ分かるでしょう？」

「ん……ぐ……ふ……はあ……」

「この辺は何て
言うんでしたっけ？」

ふる

ふる

はあ

んッ

ヤッ

「そ、そこは
Gスポット……ト
オマンコの
敏感ポイント……です」

「そうそう、ヤミちゃんの
気持ち良いところを
ゆっくり……ゆっくりと……」

「（こんな……
一度もピストンしてないのに
もう……）」

「か、身体さえまともなら……」

「く……く……
そうやって逃げようとするのも
わしを興奮させるための
プレイなんですよね」

じゅぱ……

ん

ん

ん

ん



「そうだ、その格好に似合いのアイテムがあるじゃないですか」

「……!?
これ、手錠……!?」

「手錠をかけたものの逆
に逃げられなくたってしまっ
た婦警さん、犯罪者のチン
ポで犯されて……と、前も
ご開帳」

はいて

ああ

もう

「はひいッ……!?
乳首つねるのらめえ……!」

「オマンコがヒクついてますよ
このまま奥までハメられて
ポルチオをぎゅうっと押されたら
どうなっちゃうんでしょうね」

(そんなの……決まってる……
頭の中が真っ白になって……)

「ぎあ……
もうすぐ奥に届きますよ」

ハセ

ハハ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ズ

ビクッ

ズチュウ



「か……は……あ」

（イってる……なのに……！）
入れられただけなのに……！

ビクッ

ビクッ

「どうです、イキましたか？」

「は、はひ……
イ、イキましたあ……」

「くくく、一度イクと
途端に素直になりますねえ
でも、何か妙な感じですねえ？」

「ふえ？」

ズ

ハ
ウ
ウ
ウ
ウ

ビクッ

ビクッ



「ここ数日、精液を摂取して
性感増幅の効果も
薄れてきているはず」

(そ、そういうえば……
普段の身体のはてりは
ほとんど無くなってる)

「なのになしとのセックスで
気持ちよくなってるのは？」

「ついさっきなど
挿入前から濡れ濡れでしたよねえ」

(それは……つまり……
性感増幅と関係なく
私の身体が)

「そ、そんなの
またアナタが何かしたんで」

はあ

はっ

はひ

ふん
ふん

ふん

ふん

ふん

んん

んん

んん

んん

んん

ズルリユリユ

「いひいんんんッッ!!?
そんな……
きゅ、急に出し入れしちゃ……!」

「ホントは分かってるんでしょ?
ヤミちゃんの身体は、マンコは
わしのチンポの味をしっかり
味わえるようになってるんですよ」

「ちがう……これは……!」

「ならそれも
わしを興奮させるための
演技だというのですか?」

「ああ……これエ……
マンコの気持ちいいトコ
全部こすってる
太くて、硬くて、チンポ凄いい……!」

「ため……ひっ……
認めな……んいッ……!
演技……だからあ」

ゴッデン

ぞ

ゼッ

はひ♡

あ♡

ぞあ♡

ゴッデン

ぱん

ゴッデン

ゴッデン

ぱん

ぱん

がッ



「なかなか強情ですねえ
……まあいいでしょう」

「違う……わ、わたし……
そんなえっちく……ない……」

「膣内射精に合わせて
こんなに締め付けて……」

(オマンコがイクときの
締め付けも変わってきてる……
奥へ奥へと引き込むような
えっちい動きしちゃってる)

(あああ……
また膣内に出されてる……
なんでこんなに気持ちイイの……)

「ふんはあああ——ッッ！」

ぐぐぐ
ぐぐぐ

ぐぐぐ
ぐぐぐ

ぐぐぐ
ぐぐぐ

ぐぐぐ
はー
はー

はー
はー
はー

ぐぐ

きゅん♡

はっ♡
はっ♡

ぐん

「今日はもう一つ仕込んであげますよ」

ぬー

おゆー……

「イラマチオといってクチをマンコに見立ててピストンするセックスです」

「クチ……マンコ……？」

「そうです、女の子の身体は全部オマンコですからねえ口や喉もどんどんチンポに馴染ませちゃいますよ」

「これ……さっきまで私の膣に入れて……ザーメンと愛液でヌルヌルですごくやらしい臭い……」

「自然にクチが開いてきますよ」

「ッ！ これは、その……」

「ええ、分かっていますともわしの興奮を誘うための演技というのでしょうか？
そういう強情なところも可愛いですよ」

「!? そんな……こと」



「さあ、そのまま啜えて……」

ズズズズズズ……

「ん……んあ……む……」

(なんだろう……
いま可愛いって言われて私……)

くちゅ

「いいですね
ペロ全体を使ってねっとりと
味わうように舐めてるじゃないですか」

「くちゅ……ちゅぱ……んむ……」

(すごい……こんな大きいモノが
私のオマンコをかきまわして……)

ちゅ
ぱ
ん
む

ん

ん

ん

ん

「だんだん奥に進めていきますよ
どうしても無理そうだったら
言ってくださいね」

(ああ……喉の奥まで犯されてる
息苦しいけど……
なんだかそれが気持ち良くて……)

「ん……んー……んむ……」

ん
ん
ん

「うほほ、全部のみこめましたね」

「みづ……ん……む……ふ……」

ビクビクビク……

「ゆっくり動きますから
ピストンに合わせるように
呼吸するといいですよ」

んんん！

「ん……くちゅ……じゅぼ……」

（たしかにそうしないと
呼吸できませんが……）

せせせ

あう

う♡

（なんだろう……
二人で一つのことをしてるせいか
妙な一体感がある……）

「ううッ……」

（あ、いまビクンって……
気持ち良いの……コレ……）

がる

「ああ……、ほっぺたへこませて
チンポ扱くの凄く良いですよ
そのまま続けてください」

ぶる

おぼ

ず

ん♡

ず

ん♡

ず

ず

ん♡

「ふんんんッッー！」

（ああ……おっぱい……気持ち良い……）

じゅぽ

「ちゅば……んぐ……んぐ……ふは……ほ……」

（ちゅぽ）

（ちゅぽ）

キ
ウ
ウ
ウ

ん♡

（……凄……い……ちゅぽ……ちゅぽ……ピクピクしてきた……）

ちゅぽ

ちゅぽ

「んんん……じゅるる……じゅぽ……ぐっぽ……」

ん♡

（それに、私が強くするとおっぱいの触りかたも強くなって……ああ……乳首こね回されて……）

ん♡

「くおっ……む……ふうう……」

（イキそうなんですか？ チンポの先っぽがパンパン……ああ……私もイキそう……もっと強くして欲しい……もっと……もっと……）

ぶるん

ちゅうううう——ッ

(ッ!? ク、クリトリス
吸われてるううう——ッ!!)

「んんんん——ッ!!」

ジュジュ

ジュジュジュジュ

ジュ

ジュ

「ううッ……出る……ッ!
ヤミちゃんも一緒にイッて!
イ……クウ……ッ!」

「ふうううう——んんんん——ッ!!」

(はあ……あ……すごい出てる……
ザーメン直接胃に流れ込んで……
ホントにクチがオマンコになつたみたいで……)

「んぐッ!
んぐ……んん……ぐ……」

ジュジュ

ジュジュ

ジュジュ

ジュジュ



じゅぽお

「どうです
二人で一緒に昂まっていくのも
良いものでしょう」

は♡

トロー

は♡

ぎゅっ

は

「……いつもの無理矢理とは
確かに違いましたが……別に……」

は

「セックスを通じて
犯罪者と婦警の間に芽生える愛……
わしはあると思うのですが……」

「……？」

「おや？
途中からヤミちゃんが
わしの手を握って来てましたから
そういうプレイなのかと……」

「ッ!？」

「照れなくてもいいじゃないですか
凄く可愛かったですよ」

「か、可愛いとか
言わないでください……」

セク

セク

コッ

セク

セク



「はぁ……はぁ……」

「もう目が
トロロンってなっちゃって
どんな感じですか」

「い、意地悪しないでください……
お尻の中……コツコツって動くたび
あちこち擦れて……くん……」

は♡

「お尻の中のナニが
動いてるんでしょう」

「ア、アナルビーズ……です」

「なるほど
この発情ウサギさんは
シッポを生やして
もらって喜んでるわけですな」

セク

「ひんッ……!!
それ、引っ張っちゃ……!!」

「どれどれ」

は♡

は♡

ブル

ブル

ブル

ブル

「ポンって、ビーズが
一つ出てきましたよ」

「は……くん……ん……」

「引っ張るとお尻の穴が
内側から盛り上がって
えっちいですねえ
まるでビーズを逃すまいと
しているようです」

「や……見ないでください……
はずかしい……です……」

「そういう恥じらいは大事ですよ
可愛いヤミちゃんが
もっと可愛くみえますから」

「また……
可愛いとか言って……」

「ん〜？ でも可愛いって言われる度
お尻の穴が動くのがよく分かりますよ
ホントはもっと言って欲しいんですよ」

「わ、私は……ひんっ！」

チュポ
ポツ
ポツ

ジュ
ジュ
ジュ

ん
ん
ん

は
ん
ん

ん
ん
ん

ん
ん
ん

ポ
ル

ジュ
ジュ
ジュ

ん
ん
ん

ん
ん
ん

ん
ん
ん

「はひ……ふああ……」
だめッ……!!
舐めながら抜くのらめえ……!!

「ん、ぺろぺろ……」
ヤミちゃんの身体に
汚いところなんて無いですから

あッ
あッ
あッ

アル
アル

あッ♡

あッ♡

ジュポッ

「はあ……く……ん……」

(これ……引張る力を
強めたり弱めたり……
ぎりぎりビーズが
抜けないようにしてる……?)

「もどかしさと期待が
ないまぜになった快感が
溜まっていくような感じでしよう」

(これで一気に
引き抜かれでもしたら……)

「そうして溜まった快感を一気に
それっ!」

「ンヒイッ——ッ!!」

ジュポポッ

ぐい

ジュポッ

ジュポッ

ジュポッ

ジュポッ

ジュポッ

ジュポッ

ジュポッ

ジュポッ

ジュポッ

ホ
ニ
ホ

ビクッ

ビクッ

イビク

ん
ん
ん
ん

プシャアアアア……

「は、ハヒツ……や……
お、おしっこ出てるう……」

ビクッ

「気にすることありませんよ
アヌスの快楽は排泄と
同じようなものですからね
どれ……」

「や、なに飲んでるんですか!?!」

「言ったでしょう
ヤミちゃんの身体に汚いところ
なんてありませんよ」

(この人、本気でそう思って……
じゃあ、私のこと可愛いって
言ってるのも……)

ア
ニ
ニ
ア
ア
ア
ア
ア
ア

「ぶは、堪能しました
じゃあ、次はこのニンジン型の
アナルプラグを入れましょうね
ウサギさん」

ビクッ

ビクッ

ズ

ズ
ズ
ズ

ズ

ズ

ズ



ぐむむ

ビクッ

ギョッ

ギョッ

はあ♡

ゼクッ

は♡

「く……は、あ……
ふ、太いの……入ってくる……」

は♡

かク

「これでしばらく過ごせば
今度はお尻でも
私のチンポを楽しめるようになりますよ」

あ♡

（ああ……次はお尻で……
チンポずぼずぼされてしまうの……？）

「………以前のよう
無理矢理にはしないのですか？」

かク

お月

お月

「誤解しているようですが……」

「え？……キヤッ」

かク

「わしは最初から
ヤミちゃんに“恋愛”を
教えてあげただけなんですよ」

ビクッ

「や………見ないで………」

(ああ………広げられるだけで奥からヌルヌルが溢れてきてる………)

「もう言い訳は不要でしょう
身体はすっかりわしのことを好きになってますよね」

「で、でも、こんなの………
私の知りたい恋愛とは………」

あ

人ロ

トロ

あ

あ

あ

あ

ぱ

く

トロ

「ヤミちゃんが
恋愛に興味をもったのは
小説がきっかけでしょう？」

「なら、わしが用意した小説にだって
こうしてえっちなことから始まる
恋愛がたくさんあったはずですが」

「そ、それはそうですが………」

「迷いが見えますよ
心の底ではわしを
受け入れてるんじゃないのですか」

「ちよっ、まだ話の途中……んあ！」

いん

「認めてしまえばいいじゃないですか」

「違う……私は
無理矢理犯されて……」

「こんなに
気持ち良くなってるのにな？」

「関係……ありません……
身体が元に戻ったら
出てい……ん……ああッ」

クチュ

クチュ

チュク

チュク

クチュ

「……ふむ
では勝負をしましょうか」

「しょ……勝負？」

「わしの恋愛観と相容れないなら
身体が反応してしまっても
心はそれに従わないと
証明すればいいんです」

「そんなのどうやって……」

ちよ

あ

は

ん

ピク

ピク

ピク

ピク

「今からこのチンポで攻められても
”イった”と言葉にしなれば
ヤミちゃんの勝ち
というのはどうです
制限時間はわしが射精するまでで」

「む……
私がいクことは確定要素ですか」

「ヤミちゃんの身体が
そこまで開発されているというのは
双方が認めるところでしよう」

「でもだからこそ
それを否定できれば
迷いも無くなるというもの」

「……………得るものが
釣り合っていないと思います」

「とぅとぅとぅ」

「確かに私が勝てば
迷いは無くなるでしょう
でもそれはあなたの行動を
何ら制限するものではありません」

「逆に負けた場合
あなたの考えを認め
明日以降もこの関係を
継続するというのでしょうか？」

「聡いすなあ
ではこの勝負は受けられない？」

「……………」

(どのみちこれは
私にとってもハッキリ
させなければいけないこと
それなら…………)

「私が勝った場合
以降ずっと私に対して
誓っていただけるなら……
受けてもかまいません」

「いいでしょう
では、わしからも一つ」

「……？」

「イッたかどうか
質問されたら必ず返答すること
最後まで無言でいられても
勝負の趣旨に反しますからねえ」

「……………分かりました」

「では早速
勝負開始ということ……」

「ん」

「ん」

「ずぶずぶ」



ず

いっしょ

「ふぐうッ!?
ぐううううう」

「(こ、これ
アナルプラグのせいで
お尻がいっぱい
なってるから……)」

「ふっ……んんん……
っぐ……は……あッ……」

「(すごいいいい……!
いつもよりチンポが
大きく感じる……!
壁を擦る刺激も強くて……
これじゃ……)」

「やはりヤミちゃんの
身体については
わしの方がよく理解している
ようですねえ」

「どう感じているのか
手に取るように
いや、チンポを通して
分かりますよ」

「それが……くう……
どうしたというのです
そんなの勝負を……
決する要因には……」

「しかしイク回数が
増えれば……
この辺でしょうか」

ぐりゅう



「ふあ……
あああああッあッ」

「くくく、勢いよく
潮まで吹きちやっつて
どうです、イッチャいましたか？」

イシヤアアッ

ぐ

り

カ

う

ん

ガ
ー
ヤ
ラ
ラ
ラ

「はあ……はあ……
くっ……うう……」

（なんてわざとらしい
私がイッたと
分かっているクセに
でもルール上答えなければ……）

「い、イッてません」

「そうですか
なら勝負はこのまま
続行ということですね」



「あああ……ふ、深ッ……
くっとうう……」

(この体位だめえ……
チンポの先っぽが
子宮に押しつけられて……
弱いところがちりちり
ハマっちゃってる……)

「そんなにながちり抱きついて
情熱的ですわねえ」

「ちが……!!
これは、ちよつとでも
挿入を浅くしよう……」

「またすぐイかせて
あげますからね
小さいお尻をつかんで
こんな風に回したら……」

「ひあッ!
らめっ、回すのだめ……!!」

(だめっ
チンポが奥から離れてくれない
こんなの、すぐイク
くる……キチャウ……)

「ひああああ
……」



「は、はひ……それだめ……あ、頭真っ白になる……からあ……」

「それはイッたということですかね」

「いいいいえ……イッてません……」

「これまたぎゅうぎゅうと締め付けて」

「い、イって……ないいいいッ！」

「ホントにい？」

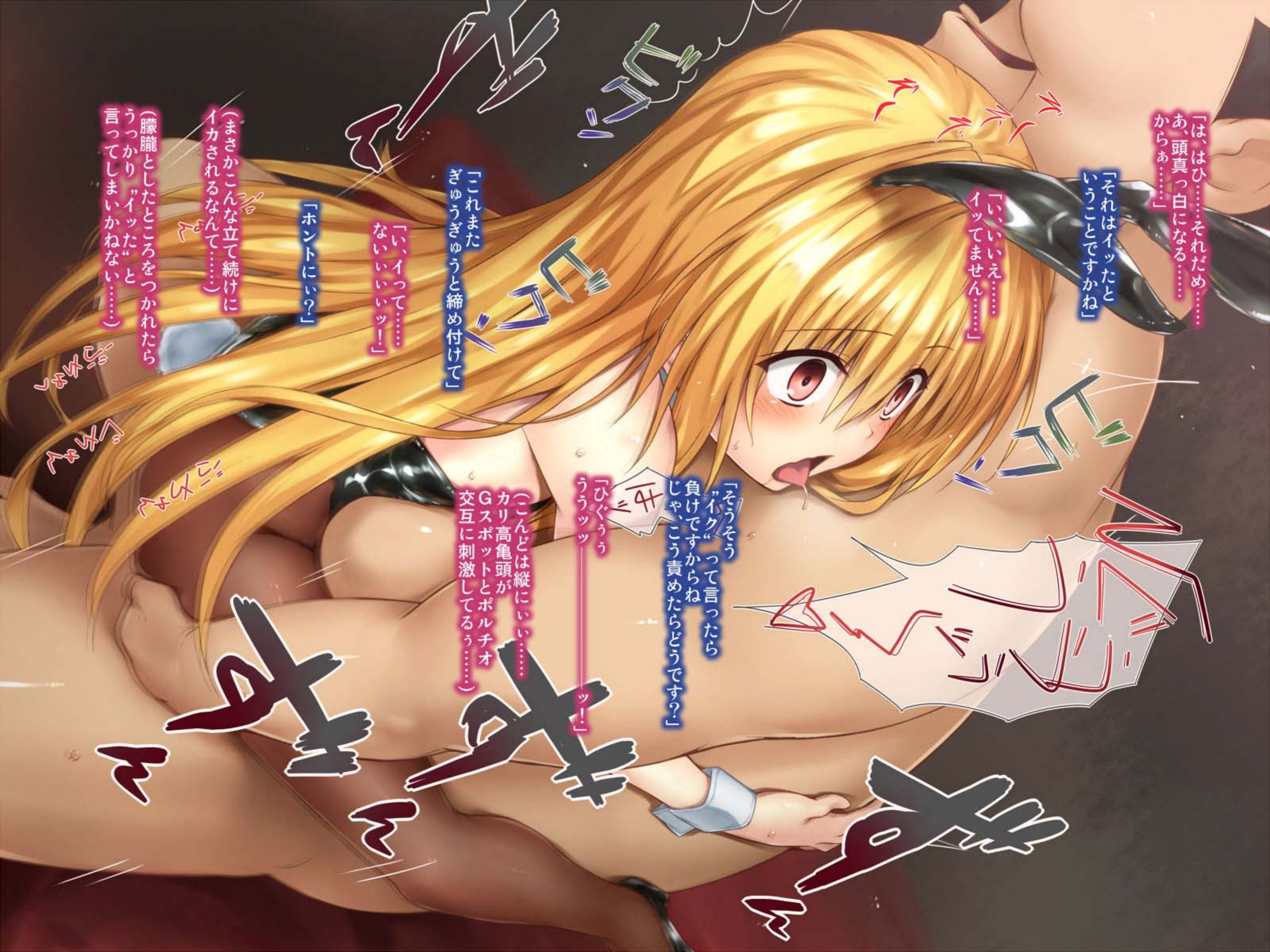
（まさかこんな立て続けにイカされるなんて……）

（朦朧としたところをつかれたらうっかり“イッた”と言ってしまうかねない……）

「そうそう“イク”って言ったら負けですからねじゃ、こう責めたらどうです？」

「ひぐううううッッッッ！」

（こんどは縦にいい……カリ高亀頭がGスポットとポルチオ交互に刺激してるう……）



(そうだ……この人の口を
手で塞いで喋れなく
してしまえば……)

ズリユ……ズチユ

「ふあ、はッ……
くうううッ——ッ！」

(だめえ……
しがつく手を離したら
チンポで串刺しにされちゃう……
これじゃ
イキっぱなしになるう……！)

「もしかしてヤミちゃん
わしの口を手で
塞ごうとしてました？」

「くっ……」

「ルール違反などと言いませんが
必死すぎませんかあ
おお、怖い怖い」

(くやしい……
こんな目の前にあるのに
他に何か……
この口を塞ぐ方法……)



(だめ) またイツちゃうッ

「うむぐッ……」

ぎゅっ

(ああ……) とっさにシちゃったけどこれ……これえ……

「ぷはっ……なるほどそうやって口を塞いできましたかでも……ヤミちゃんこれファーストキスですよねえ？」

「だ、だったらなんだったというんです！」

「ヤミちゃんから初めてを捧げてくれるなんて嬉しいじゃないですか」

「別にアナタを喜ばせるためでは……ひあッ……だめ、動かないでえ……」

世に
手
シ

ギョー
ヤ
ラ
ラ

グ
グ
グ

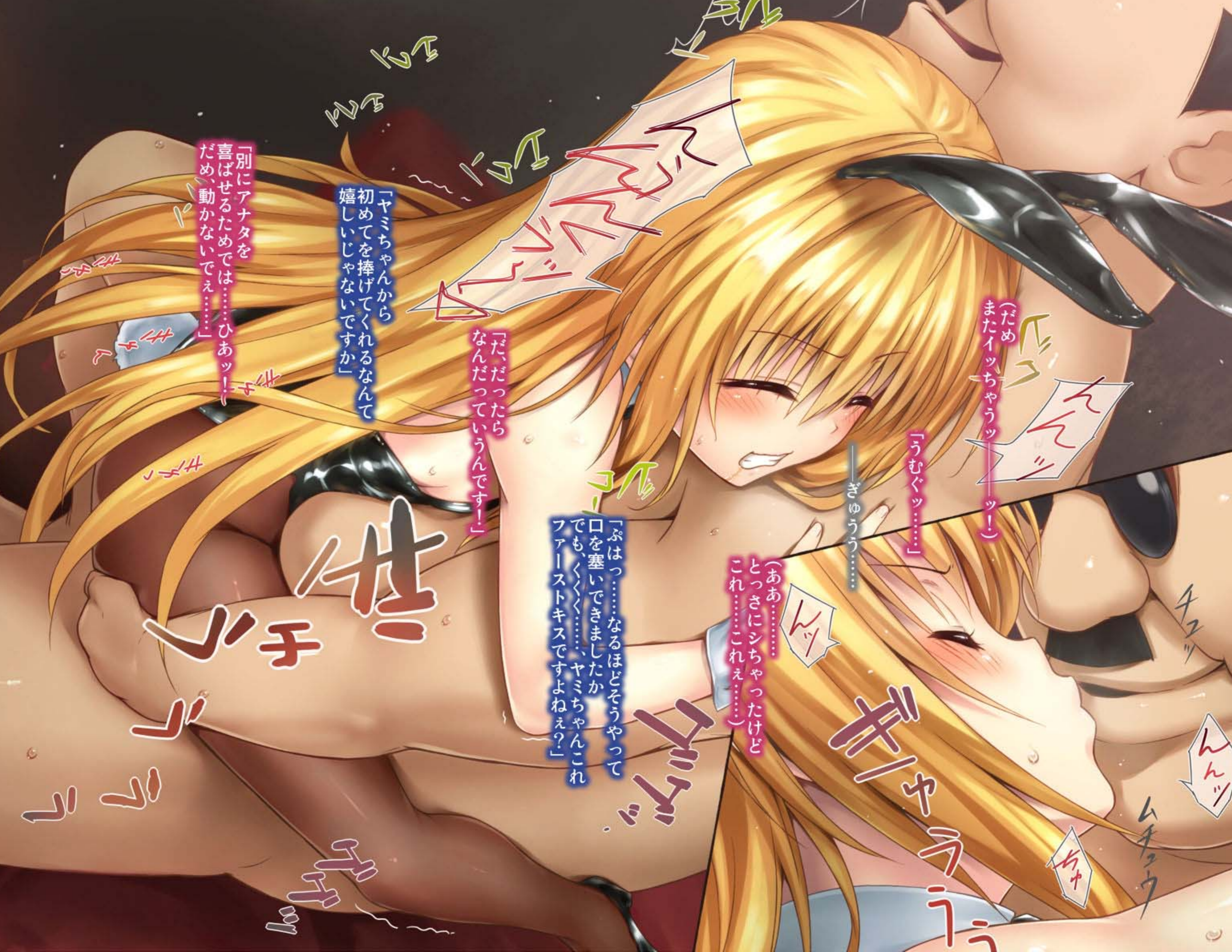
グ
グ
グ

グ
グ
グ

ん
ん
ん

ム
ム
ム

ん
ん
ん



(ああ……自然に舌が入っちゃう……なにこれえ……キスってこんな気持ちいいの……?)

「んん……クチュ……ちゅぱ……はあ」

「こういう体位のことを『だいしゆきホルルド』なんて言ったりしますがもう完全に恋人同士のラブラブセックスですねえ」

「だ、だれがあなたなんかと」

「強がるヤミちゃんも可愛いですよ」

「んっ!」

「うお、今凄く締めまりましたよ下の口で応えてくるとは可愛いなあ、ヤミちゃんは可愛いなあ」

「う、うるさい!」

(うそ、なんでこんなので……可愛いって言われてるだけなのにオマンコが勝手に反応しちゃう)

チキチキ

チキチキ

チキチキ

チキチキ

チキチキ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

(この人に喋らせないために
やってるハズなのに……
ずっとしていたくなっちゃう)

ビリッ
ビリッ
ビリッ

「ん……あ……もっと……クチュ……」

(どうして……キス……
こんなに気持ち良いの……
胸の奥から
気持ちよさが広がって……)

「ん……クチュ……
チュパ……」

(こんなの……
イクたびに舌を絡めて……
ホントに恋人同士みたい……)

「あ……んん……
だめ、またッ……
んんん……
ん……クチュ……」

ビリッ
ビリッ

ビリッ
ビリッ

んんんん
んんんん
んんんん

チュパ

グググ

チュッ

ビュルル

ビュン





キニヤフ

は は

ピク

ピク

「ぷはっ……」

(だめっ……クチ離しちゃイッてないって答えなくちゃ……)

「キスは気持ち良いですか？」

「……はへ？」

(イッたのか聞いてこない……？ なら……否定する必要は……)

はあ

はあ

「……は……い……」

「ヤミちゃんは気持ちイイの好きですもんねえ」

?

は

「はふ……好き……ちゅば……んんん」

「じゃあキスで……イッちゃいましたか？」

(これは……答えちゃ……だめ……)

「イッて……ない……んくちゅ……」

ピク

ピク

ピク

ピク

ピク

ピク

ピク

ピク

「深く繋がって奥をグリグリすると子宮口がキュキュリして気持ちいいですよ」

(これは……答えても……)

「私も……ポルチオ刺激されると腰が溶けるみたいに気持ち良くなって……」

「絞るように胸を揉まれるとさきっぱが充血して感じるでしょう?」

(これも……答えて……)

「はい……乳輪まで勃起しちゃってます」

「舌を絡め合っていると互いに気持ち良くなるうと高揚してきて気持ちいいですよ」

「は……いい……んん……気持ち良い……キス……んんちゅ……凄く興奮して好きです……」





好き♡

あ♡

ふあ♡

「では激しくいきますよ」

「好きい……激しくされて子宮にチンポの先がめりこむくらいがイイい」

「……わしとしたことが興奮して抑えが効かなくなってきましたヤミちゃんは激しくされるの好きですか？」

「ひゃっ……！ 膣内でチンポが大きくなったあ……」

（あれ？ 私なに言って……でも「イッた」って言ってないから大丈夫の……はず……）

「好きい……♡」

「わしが？」

ギョウ

「私も……可愛いって言われる度に胸の奥が気持ち良くなって……言ってくれるあなたが……」

「可愛いって言う度にオマンコ締めてくるヤミちゃんが大好きなんですよ」

ギョウ

んんん

ゆうう

キョロ♡

キョロ♡

キョロ♡

キョロ♡



「ふううおっおおおッ
は、はげひっ……
奥にドチュっつてえッ……！」

「ヤミちゃんは軽いから
駅弁するのも楽ですねえ」

「……えきべん
……」

（私の全部、この人のものになってる
振り子みたいに揺られて
凄い勢いでオチンポくるう……）

「んん……ちゅぱ……
ジュプ……んむむ……」

（ああ……キスもイイ
絡み合って唾液を交換して……
舌が溶けちゃいそう……）

んおっ♡

ほお♡
おっ♡

ふうおっ♡
おっ♡

んんんん

んんんん

んんんん

んんんん

ビチュ

ビクッ

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

んん

「そろそろイキそうですよ
どこに出してほしいですか？
いや、どこに出されるのが
一番気持ちイイですか？」

「な、ナカアツ………！
膈内にどぶどぶ
出されるのがイイのおツ！」

「じゃあ出してあげますよ
子宮満タンにして
重さが分かるくらいに
たつぷりと」

「キてえツッ！
出してツツ！！
いっぱいにしてえツッ！！」

「い、くおとおおおおおツッ………！」

「私もイッ………！」





(キスされながら膣内出しがいい……
子宮が一杯になるの分かるう
染められちゃう
子宮も私もこの人色に染められちゃう)

ジュルジュル

ジュルジュル

「……ッ♡」

ジュルジュル

ジュル

ジュルジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

ジュル

「……ぶはっ
いやー出した出した
しかし残念ながら
勝負はわしの負けですわねえ
ヤミちゃんが“イク”と言う前に
わしの方が果ててしまいましたから」

「は……あひ……
は……あ……」

「と言っても分かりませんが
まあ聞きたい言葉も聞けましたし
楽しみに明日を待つとしましょうかね……」



(目が覚めると一通の手紙が置いてあった)

おめでとう、勝負はヤミちゃんの勝ちです
約束通り私は身を引くことにします
館の入り口は解錠しておくので
お帰りはお自由に
校長より

「……………」

(実のところ、勝負終盤の記憶はあやふやで
勝ったという実感に乏しいのですが……
向こうが負けを認めているのだから
そうなのでしょう)

(それよりも奇妙なのは……)

「これは……寂しさというものなのでしょうか」

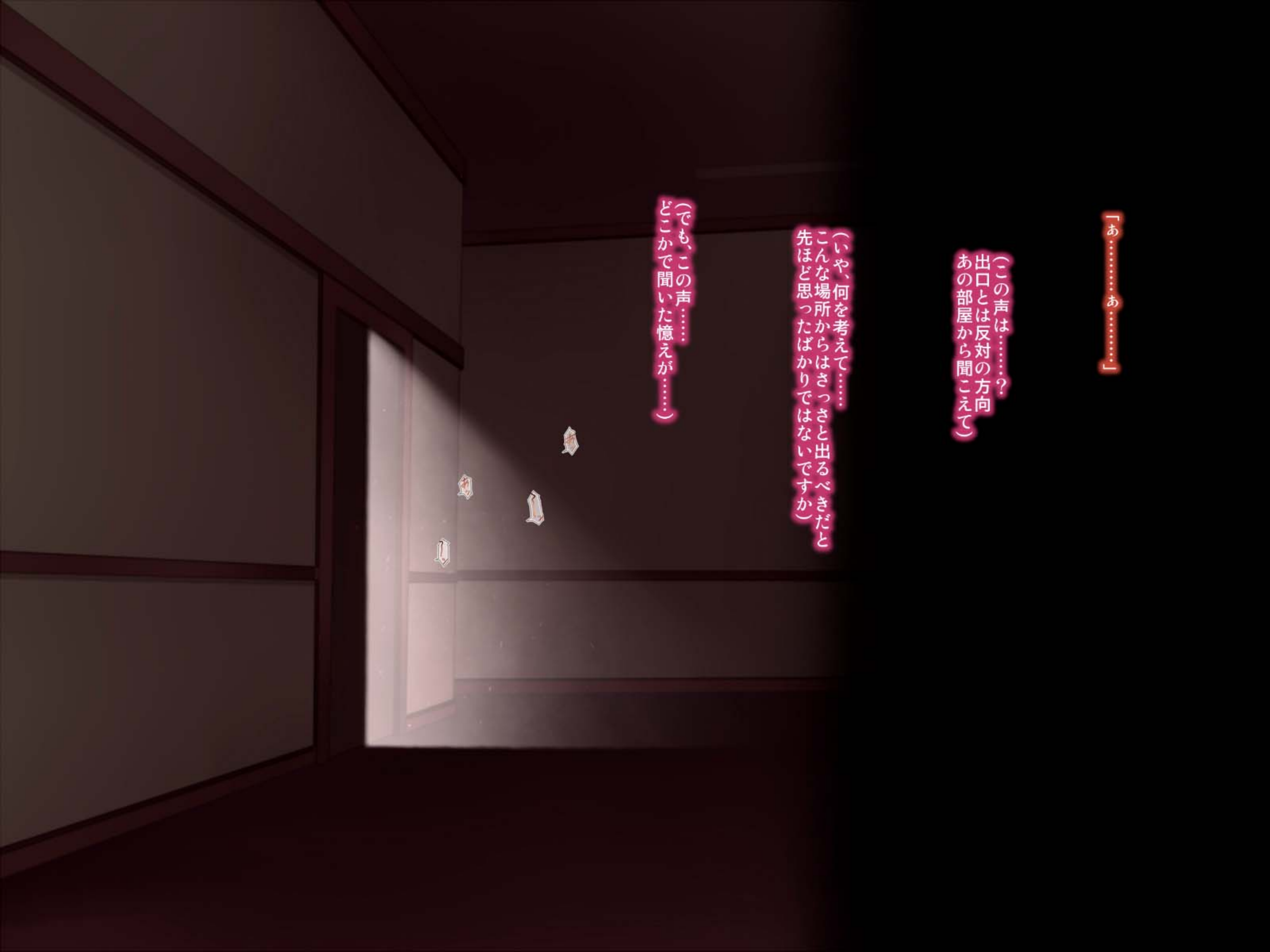
(いや、そんなはずは……
あっさりと事が終わって拍子抜けしているだけです
ここから出ればきつと……)

「あ…………あ…………」

(この声は…………?)
出口とは反対の方向
あの部屋から聞こえて)

(いや、何を考えて…………
こんな場所からはさっさと出るべきだと
先ほど思ったばかりではないですか)

(でも、この声…………
どこかで聞いた覚えが…………)



「そっおッー! もっと突いてえ!
じゅぼじゅぼイイのおッー!」

(これ……!?!
私とあの人のほかにも……
しかもこの声……)

「おまんこトロけて
何も考えられなくなるうッ!
激しいのイイよお……ッ!」

(相手の娘が私の想像通りの人物なら
私は怒って当然のはずなのに……)

(私……今“うらやましい”って……
違う! そんなこと思っていない)

ゼーよう

ズ
チ
ズ
チ
ズ
チ
ズ
チ



「こんな場所で男をくわえ込んでおねだりして……悪い子だねお兄ちゃんにあやまらないと」

「ごめんなさい！
悪い妹でごめんなさい！
でも好き合っている同士がセックスするのは当然のことだもん♡
こんな気持ちイイの止められないよお」

（ああ……あの子がホントに感じてるのが分かってしまうあんなにもオママンコをヒクヒクさせて……）

「どうしたんですか、こんなところで」

「ッー！」

「お静かに、彼らの邪魔しちゃ悪いですよ」

「あなた、なんで……」

「玄関で見送ろうと待っていたんですがヤミちゃんがなかなか来ないものだから」



ぎゅんぎゅん

ぎゅんぎゅん

ぎゅんぎゅん

ぎゅんぎゅん

ぐんぐん

ぐんぐん

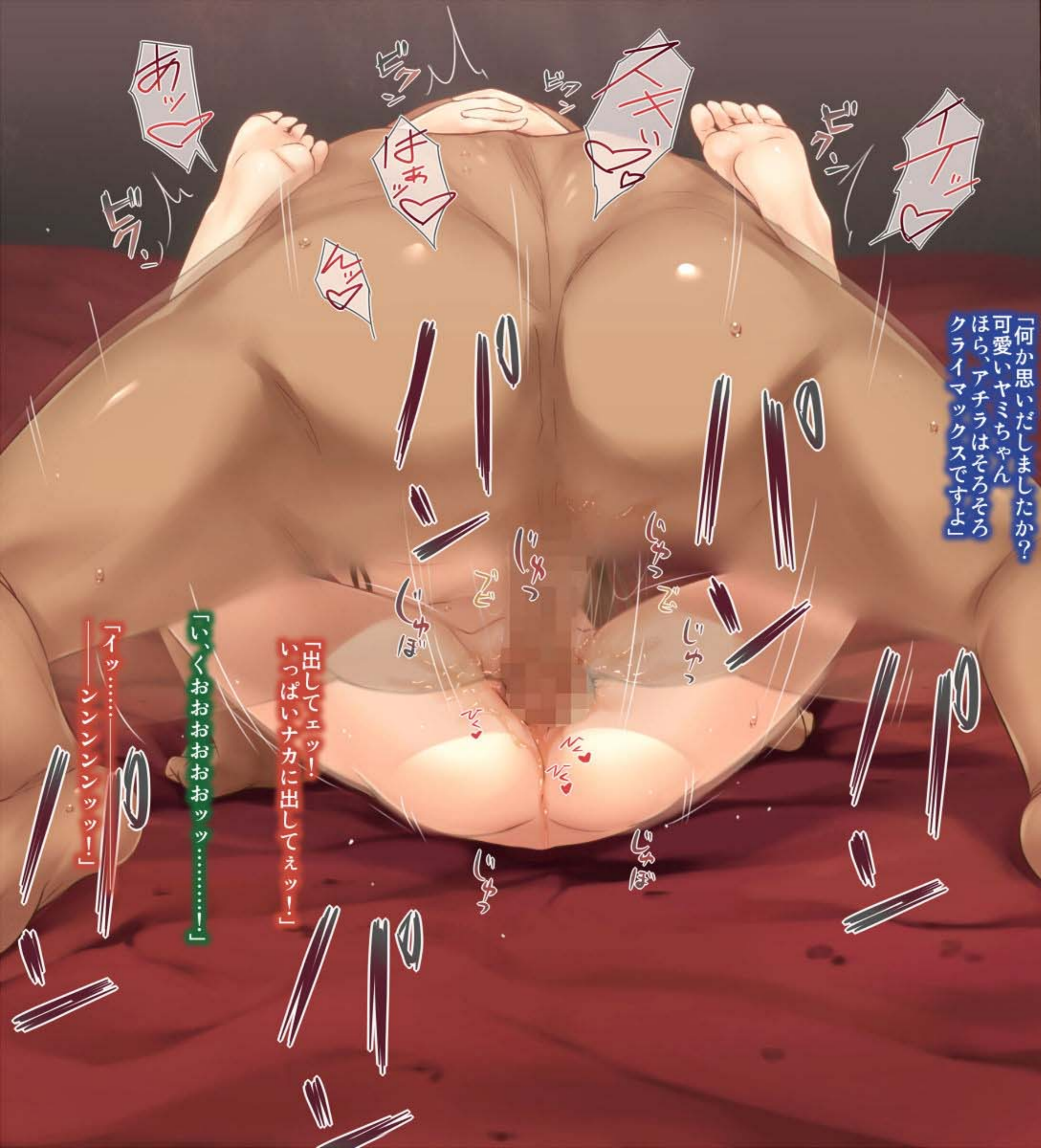
ぐんぐん

ぎゅんぎゅん

ぎゅんぎゅん

ぎゅんぎゅん

ぎゅんぎゅん



「何か思いだしましたか？
可愛いヤミちゃん
ほら、アチラはそろそろ
クライマックスですよ」

「出してエッ！
いっぱいナカに出してえッ！」

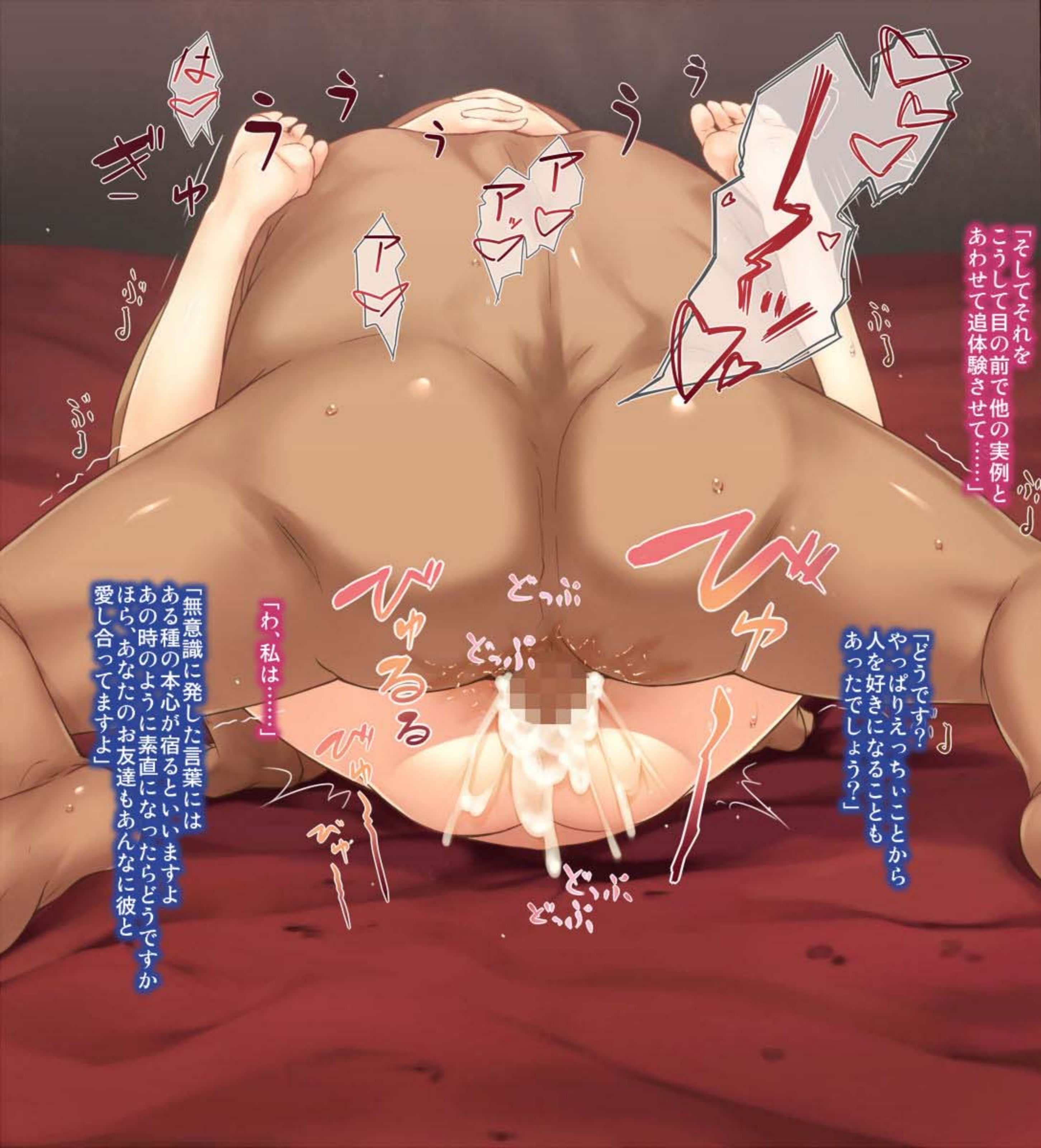
「い、くおおおおおッ……！」

「イッ……
ンンンンンンンッ……！」

「あ……わ、私……！」

（思い……出した……
そうだ、私も……
あんな風に責められて……
この人に……好……）





「あーあー、あんなに出して妊娠しちゃったらどうするんでしょねえ」

「あ、あの時のアナタもイクと言いかけた私のクチをキスで塞いで……最初から勝負などどうでもよかったのですね」

「そういうわけではありませんがわしはヤミちゃん気持ちは聞きたかったのでねえ」

「そしてそれをこうして目の前で他の実例とあわせて追体験させて……」

「どうです？ やっぱりえっちいことから人を好きになることもあったでしょう？」

「わ、私は……」

「無意識に発した言葉にはある種の本心が宿るといいますよあの時のように素直になっただらどうですかほら、あなたのお友達もあんなに彼と愛し合っていますよ」





「やあん……
まだ抜いちやだめえ……♡」

「ああ……美柑……
あなたまで……」

「あ……ヤミさんだあ……
どうしたんですかそんなところで
こっちへきて
一緒に気持ちよくなりましょうよ」

「彼女もああいってますよ
ヤミちゃんもさつきから身体が
ウズいてしかたないんでしょう？」

「さあ、もっと可愛いあなたを
わしに見せてください」

「ああ、私……私……」

は

は

は

は

は

びるるる

ギ
イ
イ
イ

びるるる

びるるる

びるるる

びるるる

びるるる

「そう……なんです
オマンコにチンポが
ずぼずぼ入っているのを見ていただけで……」

「腰と腰がぶつかりあう乾いた音を聞いただけで……」

「汗とよだれと愛液と精液がまじりあう
すえた臭いをかいただけで……」

「それだけで
こんなに濡れちゃうくらいウズウズして……
同じことをしてほしいって……」

「あなたの言うとおりでした」

「私」

じゅん



「えっちいこと……
好きになっちゃいました♥」

はー

はー

はー



「うほほ、アナルはこの入り口の締め付けがたまりませんねでもそこを過ぎれば……」

ズリユンッ

オア♡

は♡

はあ♡

んん♡

あ♡

は♡

?日目

あ♡

「ひゅーいよおッ……お尻きもひいよお……ッ!」

「あちらもお盛んですねえ」

「す、すみません……興奮して上手く入れられなくて……」

「いえいえ、あやまることはありません
ヤミちゃんが後ろの処女を
自ら捧げてくれるというのですから
いくらでも待ちますよ」

「はい……頑張ります
う……んん……大きいのが
は、くう……入って……」

オア♡

オア♡

オア♡

オア♡

オア♡

オア♡

オア♡

「くひいッ
は、入っちゃった……
奥まで……」
「一気に……ッ！」

「そうそう、一番太い
カリの部分さえ通れば
こんな風一気に、ね」

ビクッ

んんん

「はあ……肉の塊でお尻の穴……
一杯になってる……」

「どうです？
初めての場所にチンポを受け入れて」

ズク
ズク

「よく分かりませんが
いつも気持ち良くなる場所が
別の場所から
刺激されているような……」

ビクッ

んんん

「膣が裏側から刺激されているのですよ
でもそれはオマンコを基準にした感じ方
アナルの良さは抜くときが本番です」

「そ、そうなんですか……？」

「ゆっくりと腰を上げてみてください」

ぬる

る

る

ん



「ひあッ……!!?
す、すご……出てくう……
んおおお……オチンポがあ……」

「排泄時の快感が
ずっと続くような快感でしょう」

「めくれちやうう……
裏返っちやう……
お尻とけちやう……!」

「二度入れて出しただけで
もうトロトロですね」

「だ、だって……
アナルプラグなどで
慣らしてましたから……
最初から気持ちよくてもイ
イイ……」

「じっくりほぐした甲斐がありましたね
さあ、後は自由に動いていいですよ」

「はあい……んん……ふあ……
ああ……また奥まで入ったあ……」



「ときにその格好は……
結城さんとデートしたとき
トランスで作った服と似ていますが……」

「はい……
あなた好みにアレンジしてみました
どうですか……?」

「とても似合っていますよ
世界一可愛いです」

「そ、そう……ですか……(ポッ)」

はぁ♡

は♡

ん♡

はぁ♡

はぁ♡

「トランスをわしのために
使ってくれたのもうれいですがね
………ということは性感増幅の効果は
すっかり無くなっているのですね」

「ええ、でも今の方がずっと気持ちいいんです
身体の隅々まで意識できるというか……ん♡」

「むほっ……急に締め付けて」

「こんなことも出来るんですよ……?♡」

「た、たまりませんねえ」

キョウ♡

キョウ♡

「はあ……だんだん……
勝手が分かって……きまひた……」

「あああ
あああ
あああ」

「良い感じにトロけてきましたね
そろそろわしも動きますよ……それっ」

「ひあああ……んっ！
ひゅこ……動き……
合わせるだけで……こんら」

「チンポが抜けかける
くらいまで引いて……」

「ふああああ……んっ！」

「ヤミちゃんが
腰を降ろすタイミングで……」

「ふおおおううう……んんっ！」

「さっきから小さくイッてますねえ
そのたび入り口がキュッと
締め付けてきてますよ」

「イッてましゅう……っ！
小さいアクメ
れ、連続できてましゅう……っ！」



「も、身体支えられなふてえ……
なのに腰が……
勝手に……跳ねてえ……」

「大きいのがキそうなんですわ
いいですよ中に出してあげますから
初アナルの初中出しで
マジイキ決めちやいなさい」

ジュポツ——ズチュツ——グチュツ

「うほおおおおおッ……ッ……
は、激しいいいッ……ッ……ッ……
しゅこ……抜くときの快感が消えないうひに
裏から子宮突かれへえ……」

「これらめッ……ッ……ッ……
どんだん昇ってくるうッ……ッ……ッ……ッ……
イク、イクイクッ……ッ……ッ……
ケツマンコ♡イク……ッ……♡……ッ……♡……」



「は、はひ………でへるう……
おひりの中にザーメン……
いっぱあい………」

「ふー
これでヤミちゃんの初めては全て
わしが頂いたことになりますねえ」

「ふあい………」

「一段落ち着きましたかな」

「おお、そちらはどうされました」

「美柑ちゃんは、ホレ
お尻でイキすぎて休んでいるのね」

「ははあ………そういうことですか
しょうがありませんなあ
前はわし専用ですが、後ろなら今しがた
開通しましたからそちらなら………」



「妬けますなあ
まあ私も美柑ちゃんの前を
使わせるつもりは
ありませんけどね」

「ひゃ……な、なんれすか……」

「見てのとおり
ヤミちゃんの前と後ろの穴を
同時に気持ち良くして
あげるんですよ」

「や、まっへ……私まら……
いったばかりれ……」

「心配いりませんよ
後ろの彼もこういうことには
慣れていきますから」

「ええ、存分に
気持ちよくなってください」

「そ、そういう話れは……」

あぁ♡

あ……♡

ひゃっ♡

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん

びゅん



「少しタイミングをズラせば……」

「ひああああッ——ッ！
同時に奥突くのらめえッ——ッ！」

「ヤミちゃん
白目むいちやっってるじゃないですか
酷いなあ(笑)」

「いやいや、彼女はこれが
わしなりの愛情表現だと
理解してくれていますから
ね、もっとしてほしいですよ？」

「そうらのお……♡
私のこと好きだからあ……！
気持ひイイのが好きな私も
もっとこの人に恋しちゃうのおッ……！」

「これは……
ますますもって妬けますなあ
このままケツ穴を攻めて
良くしてあげれば
私のことも好きに
なってくれますかねえ」

「ぬ、聞き捨てなりませんな
あくまで彼女を
最も気持ち良くできるのは
このわたしですよ」

「さっかー」

「や……ちよ……
ヒアアアアアッ……
は、はげひ……
そんなにひたらオマンコと
ケツマンコ繋がっひやう！」

「ふんっ……うんっ……
ケツ穴の方が気持ちいいでしょう？」

「しゅ、しゅごいですううッ！
しよんなカリ高チンポで削られたら
ケツ穴のヒダヒダ無くなっひやううう！」

「いやいや、
ハメ慣れたオマンコの方が
気持ちいいですよね」

「オマンコ穴
完全にチンポ型になってるのお！
入り口から奥までびっちりれえ
このチンポ以外考えられないのお！」

「らめ、そんらの、競争ひちやらめえッ！
中の気持ち良いところ
ゴツゴツ……ジュボジュボッってえ
もうらめ、とぶ……「穴アクメくるくる
キチャウッ」



は

「しゅご……えっちいことしゅごい……
あふれてくるせーエキで……
まら……いっぴやう……」

「はあ……はあ……」

は

（ここまで堕ちれば
もう監禁しておく必要もないでしょう）

「はあ……えっちいの……もっとお」

は

（誰かが不審に思っ
てヤミちゃんを探し始める前に……）

「ヤミちゃん
他の場所であつちいことをするのに
興味はありませんか？」

は

「ほかの……ばしょ？」



「わしは、”長期の出張”のせいで校長としての雑務が溜まっているでしょうしヤミちゃんも欠席していた間の勉強が遅れているでしょう」

「学校……ですか」

「遅れた分の勉強をわしがみてあげますよ」

「そんなことを言って……えっちいことも教える気なのでしょう？」

「うほほ、学校ならいつでもペロペロし放題ですからねえ」

「はい……またココにいっぱい注いでくださいね♡」

